

「埼玉大学基金」を設立 ー大学機能の強化推進のためにー

埼玉大学は、社会の変革を担う人材・グローバル人材の育成、世界的な研究成果やイノベーションの創出など、国民や社会の期待に応えるべく、大学機能を抜本的に強化する「強化戦略」として「学部の枠を越えた再編・連携による大学改革」の構想を固め、実現に向け邁進してまいります。

このため、これまで多くの皆様のご理解とご支援を賜ってまいりました「埼玉大学発展基金」を、明確な2つの目的、具体的支援事業をもって再構築し、「埼玉大学基金」として新たに設立しました。

目的1

特定重点事業「埼玉大学インターナショナルレジデンス(国際学生寮)新設事業」 埼玉大学創立70周年(平成31年度)記念事業

幅広い視野と課題解決能力を備えたグローバル人材育成の質的・量的充実に向け、日本人学生に海外留学の機会を多く与えるとともに、外国人留学生を積極的に受け入れ、日常的に日本人学生の国際意識の高揚に資する環境を整備します。この一環として、これら学生の双方向の交流の場となる混住型の「国際学生寮」を新設します。

(募集期間:平成25~31年度 目標額:5億円)

目的2

「埼玉大学の機能強化等将来構想実現に向けた中・長期戦略事業」

埼玉大学の基本方針を具現化する取組の着実な実行とともに、激しく変化する社会に対応すべく大学機能の再構築と新たな展開に向けた事業を推進します。

機能強化戦略(研究力と人材育成の強化)

- 研究力強化
- 工系人材育成の量的・質的強化
- 人文社会系人材育成の質的強化
- 教員養成の質的強化

- 全学の教育の質的転換
- グローバル人材育成の推進

支援事業

- 教育・研究・学生支援
- 国際交流支援
- 社会連携支援

「埼玉大学基金」の趣旨に格段のご理解を賜り、何卒お力添えくださることを心よりお願い申し上げます。

詳しくは、埼玉大学ホームページをご覧ください。 <http://www.saitama-u.ac.jp/funds>

モニュメント周りに花壇を設置しました。

モニュメント設置土台周囲とその北側にある芝生地帯を、花壇として整備しました。

整備作業は、教育学部技術専修の授業の一環として行われ、学生たちが学んできた技術を発揮した結果、きれいで華やいだ花壇として生まれ変わりました。花壇の花々は年に1回植え替える予定です。

埼玉大学へお越しくださる来訪者を、季節に応じた花々が、キャンパスの豊かな緑とともに心より歓迎します。

**技術専修のみなさん
ありがとうございました**



共生のVision

知と技を社会につなぐ



研究成果を地域に発信 ー「大麦」と「第3のみつ」をみなさまへー

「SAITAMA Smile Women フェスタ」
2013年9月14日、15日に開催された「SAITAMA Smile Women フェスタ」において、埼玉大学は、埼玉大学産学官連携協議会「大麦食品研究会」(代表:円谷陽一教授)を中心となって開発した「機能性大麦粉」(「フード・アクション・ニッポンアワード2012」研究開発・新技術部門で優秀賞を受賞)を活用した、「大麦稻庭うどん」や「大麦ハイブレット」をグルメゾーンに出展しました。埼玉大学と連携しているNPO法人秩父百年の森が開発した「第3のみつ Api-mitsu apple」も出展し、ブースは多くの参加者で賑わいを見せしていました。

連続市民講座では「大麦パン」の試食も

また、9月28日に開催された「埼玉学のすすめ part4」第3回「大麦β-グルカンと健康」と題した講座(講師:円谷陽一教授)では、受講者全員に「大麦パン」を試食していただきました。「モチモチ感があっておいしい」との多数の感想のほか、「もっと健康に注意したい」「多くの人に広めてほしい」などの意見も寄せられました。



CONTENTS

Preview Point

埼玉大学の教育の質的転換 01

理事・副学長 加藤 泰建

The Focus

埼玉大学のきめ細かな就職支援 02

学生支援課 就職相談員 元川 ゆかり

ここに注目! Close up

2013堀場雅夫賞 特別賞受賞

複雑な試料の中の微量重金属イオンの計測法を開発 03

大学院理工学研究科 准教授 斎藤 伸吾

New Wind

「埼大ワールドカップ2013」新たなスタート 04

Focus of activation

埼玉大学の主な出来事 05





グローバル社会に対応するために、 眞の最高学府として学生を輩出するために、 大学教育の質的転換を図る。

Yasutake Kato
理事・副学長 加藤 泰建

国際社会を生き抜くために、学生
も大学も意識変革が必要

日本の学校教育の仕組みとして、高校までは授業に出て、出席日数さえ基準に達していれば大方の生徒は卒業できるという慣習があるようです。もちろん期末試験や卒業試験にパスしての話ですが、その仕組みに慣れてしまった学生は、やはり大学でも授業に出ていれば単位が取れる、授業が勉強のすべてという意識が染み付いてしまっています。

最近の大学生は勉強しないといわれます。それはどういうことなのか？ 埼玉大学の1,2年生にアンケート調査をしてみました。意外な事実として現れたのは、「授業以外にまったく勉強しない」が40%を占めることでした。その内60%の学生が、理由として「期末試験の勉強だけをすればよい」と答えています。授業への出席率は非常に高いので、決して怠けているわけではないのですが、授業が勉強で、それさえ出ていれば単位が取れる、卒業できると思っている学生が約半数を占めているのです。

大学の単位の考え方は国際的に共通しています。基本は時間数で、45時間の学修量に対して1単位与えます。これは学生の学修時間量を指し、授業時間だけではありません。したがって授業だけに出ていても、実際は单



位取得に必要な学修量を満たしていないことがあります。欧米、近隣アジア諸国の大学生は日本の学生に比してよく勉強すると言われますが、それは授業以外にも何らかの学修を自ら行い、質量ともに充実した勉強をしているからです。そもそもの勉強の考え方、学修のやり方が違います。これでは日本の学生が社会に出て、ましてや国際社会のなかで、大きく差をつけられてしまうのではないかと危惧されます。

グローバル人材の育成を目指す埼玉大学としては、手をこまねいでいるわけにはいきません。「がくしゅう」を埼玉大学では「学修」と記すように、習うのではなく、自ら学んで修める学修の一層の強化を、勉強への意識変革を、学生のみならず教員を含めた大学全体で取り組んでいかなくてはならないと考えています。

本当の力を身につけて卒業して もらうための改革を目指す

具体的には次のような改革案を、いま議論しています。

1. 単位取得に必要な学修量についての理解

日本の大学では大体一つの科目は15回の授業が行われ、15回に対して2単位を認めています。正味90分授業として15回で1,350分(22.5時間)、つまり授業だけ出席していても1単位の想定学修量の半分しか満たさないのです。学修量を満たすためには、授業前後の自主的な学修が必要です。事前に充分な準備を行い、授業はその確認と照合、事後は検証と課題の抽出・展開にあてる、その3点セットが大学の学修であるとの認識を学生に周知していきたいと考えます。

2. シラバスによる学修内容の具体化・到達目標の明確化

これまで15回の授業内容を記載したシラバスを出していますが、単に要約に止まらない、具体的な授業内容と学修の指示、到達すべき目標を記載するよう教員に求めています。この授業を受け終えたら、こんなこ

とが身につく、マスターする目標を明確にして、そこに到達するために一つひとつの授業はこんなことを行う、またこの授業にはこんな事前準備が必要で、事後の展開にはこの本を読むとよいなど、具体的な工程表のようなシラバスを想定しています。さらに教員には、事前・事後学修の結果を授業の場で学生にフィードバックするなど、より立体的な授業の設計転換を図ってもらいます。

3. カリキュラムの体系化

授業科目を選択するのは学生ですが、より効果的で効率的な採り方をサポートします。一つひとつの授業の関連性や学修の設定目標を明確にしたカリキュラムマップをつくり、卒業時の到達目標への道筋がひと目で辿れるものを想定しています。4年間で124単位、無理のない年次での配分、効率的な選択で、最終的な目標に到達してもらいます。

4. 学修の質を大学が保証

学生が4年間で本当に身につけたこと、成長したことを、厳格な成績評価の下に示し、社会に対して保証することを制度化ていきたいと考えます。端的に言えば124単位×45時間の学修でやり遂げたことを、修得内容を具体的に記載したシラバスで証明し、さらに目標到達度をGP(グレードポイント)で示します。成績評価は個々の教員の恣意的要素の入らない統一基準で行います。

日本では大学を卒業したという事実を重視するものの、何をどれだけ学修してきたのかに注目することはあまりありません。感覚的な大学のラベル偏重もそれを助長し、学生が真の学修をしなくなった一因もそこにあるといえます。埼玉大学では、大学で学ぶ意義を見つめ直し、いま、敢えて大学教育の在り方に一石を投じようとしています。最終的に大切なことは、卒業時に学修したことが身についていること。いっぺんに改革はできません。2014年度の新1年生から、学部間の調整を取りつつ徐々に教育の質的転換を取り組んでいく予定です。

Support for Employment

就職支援

きめ細かな親身なカウンセリングで、就活に臨む学生をサポートします。

全 体と個別、 両面からのサポート体制

今春4月に新入社員として社会に巣立つていった学生の就職戦線から、徐々に企業の採用意欲も向上してきて、数年前の超氷河期のような厳しい状況は払拭されつつあります。しかし就職活動は、いつの時代でも、学生生活後半の歳時記として、一時期を心身ともに拘束することに変わりありません。その就活を迎える学生の道しるべとなり、また活動の真っただ中では不安解消や問題解決で学生を支える役目を果たすのが、学生支援課の就職支援です。

埼玉大学の就職支援は大きく分けて二つの側面があります。ひとつは就職に関する情報提供とガイダンス・セミナーなどの支援行事の開催、インターンシップへの参加支援といった全体に関わるハード的な側面。ふたつ目は就職相談員(カウンセラー)による、学生一人ひとりを対象とした就活への具体的なアドバイスを行うソフト的な側面です。

就活の準備や意識を高めるためのガイダンス・セミナーは、こことろ夏に行われています。秋には業界・企業研究セミナーや就活対策セミナーが開かれ、学生は方向性を定めて本番に突入してきます。就職相談は通年行われ、年間約2000件(予約制、予約不要含めて)の相談に11人の相談員が対応します。個室で行われる予約制のカウンセリングは、面接時の動作・所作のチェックや想定問答シミュレーションなど、より個人的な突っ込んだ面談が行われます。

支援体制として出したものない一般的な施策ですが、毎年、民間企業、官公庁、教員へと質の高い就職実績を実現しています。

相 談員は、学生一人ひとりの可能性 を引き出すためにある

就職相談員として埼大生に接していく感じるのは、絶じて真面目で、自分で考えて答えを出せる力をもっている人が多いことです。またそれを自分の言葉で表現できる聴覚もあります。埼大生が高質な就職を実現しているのは、局面を開ける高い素養が發揮されているからこそと考えています。

就職相談で私たち相談員がもっと大切にしているのはヒアリング、学生の想いを聞くことです。相談室に来る学生は、何かしらの悩



学生支援課 就職相談員
元川ゆかり

み、不安、迷いを抱えています。その問題に、こちらから早急に答えを出して指示してしまうのは簡単ですが、本人にとって何の解決にもなりません。答えを聞いて安心して終わりです。私たちは一緒に考えて、本人が納得して自分の答えを出すまで寄り添って、道筋を通して明るくするだけ。例えば業界を絞り切れずに迷っている学生がいれば、どのような価値観をもってこれから生きていきたいのかを、しっかり考えさせ、自分に合った業種・職種を導き出します。学生には一人ひとり可能性があります。直接で連敗を重ね落ち込んでいる人には、自分が持つ可能性を感じられるように、気付きを導きだします。

昨今、新卒入社3年目までに3割が辞めるとされていますが、過保護なレールの上で就活をしたり、イメージで業種を決めたり、小手先のテクニックで内定を得た学生と違い、埼大生はその3割にならないと確信しています。相談室に来た学生には、就職はゴールではなく、充実した人生を送るためにスタートだと常に言っています。元々聰明な埼大生は、そこでしっかりと将来のビジョンまで描いて就活に臨むからです。

1 年次から、目的意識を持って勉強し、 経験することが大切

最近の就活学生を見て少し気になることは、就職に対して淡白な傾向にあることです。一度失敗すると諦めてしまったり、逃げの姿勢で大学院に進学したり、就職観が年々薄くなっていると感じます。これは社会一般的な傾向とも言えますが、その反面、1年や2年生時から就職や進路に関する相談に来る積極的な学生もいます。大学は、少なくとも埼玉大学

は就職予備校ではありませんから、1年から就職を前提としたガイダンスやカリキュラムは組まれていません。しかし、1年次から何か目的意識をもって勉強し、さまざまな経験を積むことはどんどんやって欲しいと思います。いろいろな経験のなかから、何をしているときが自分は一番喜びを感じるのか、それを仕事にするとしたらどんな業界があるのかと、次第に就職観が育まれていきます。また一生懸命に取り組むことで、やり遂げた自信もつけられます。就活に際して、何かやってきた学生と、何もやってこなかった学生とでは、就職観、意識面でも雲泥の差が出てしまいます。

保護者の皆さまにお願いしたいのは、まず就活生に対しては過保護、過干渉にならないように、また逆に放置にならないように、さりげなく寄り添って背中を押してあげて欲しいです。1,2年生にはサークル活動でも研究でも何でもいいですから、打ち込めるものを持つように促して欲しいです。欲を言えば周りの人と協調してやり遂げられることがよいと思います。直接、間接を問わず、就活だけでなく社会人になったとき、必ず役立つ糧になると思います。



Support schedule for Employment

就職支援スケジュール(3年次4月~)

*2013年度採用協定スケジュールによる

- | | |
|----------|--|
| 4月~ | ・埼玉大学就職支援メール登録開始 |
| 6月~ | ・就職プレセミナー |
| 7月 | ・就職総合ガイダンス |
| 10月~翌年4月 | <ul style="list-style-type: none"> ・自己分析セミナー ・業界研究・企業研究セミナー ・エントリーシート基本対策セミナー ・女子学生セミナー ・留学生セミナー ・モノづくり企業の技術系職種研究セミナー ・模擬面接(集団) ・模擬グループディスカッション ・模擬面接(個人) 7月まで ・先輩(内定者)による就職支援(フリートークセミナーなど) ・学内合同企業説明会 ・学内官庁関係説明会 ・その他各種セミナー |
| 4月~ | ・採用選考 |
| 5月 | ・就活リスタートセミナー |
| 6月~ | ・学内個別企業説明会 |
| 10月~ | ・採用内定解禁 |



複雑な試料の中の微量重金属イオンの計測法を開発

祝受賞

2013 堀場雅夫賞 特別賞

「新規蛍光プローブによる放射性廃棄体中および
環境微生物中の重金属イオンの超高感度電気泳動法の開発」

大学院理工学研究科 斎藤伸吾 准教授

PROFILE

1996: 東北大学工学部 卒業
1998: 東北大学大学院 博士前期課程修了
2001: 東北大学大学院 博士後期課程修了
工学博士
2001~2007: 北見工業大学工学部 助手
2007~: 研究科 理工学研究科
准教授

受賞歴

2004: 北海道分析化学奨励賞 受賞
2008: 日本分析化学会 奨励賞 受賞
2011: 36th International Symposium on High-Performance Liquid Phase Separations and Related Techniques (HPLC2011), ベストポスター賞
2013: 日本原子力研究開発機構 先行基礎工学研究 表彰
2013: 堀場雅夫賞 特別賞 受賞



光らないはずの物質を光させて検出する

この度、「堀場雅夫賞 特別賞」を受賞させて頂くことになりました。この賞の趣意は「画期的な分析・計測技術の研究開発に従事し、将来の活躍が期待される国内外の研究者を表彰する」というもので、大変喜ばしく光栄に存じます。

さて、私の進めている研究内容は、簡単に言うと複雑な組成の混合物の中の超微量な重金属イオンを光らせながら、かつ空間的に分離することで高感度に検出する方法を開発するというものです。そのためにはまず、重金属イオン類を発光(蛍光化)させなければなりませんが、一般にこれらは発光特性を持っていません。むしろ、重金属イオンは近くに存在する蛍光性分子の発光を消してしまう(消光する)ことが知られています。そこで、重金属イオンと強く結合しつつ消光を起こさない分子(プローブ)を開発しました。この時、発光する部分(蛍光団)と金属イオンとの距離を調整することや、金属とプローブとが分解してしまわないように(解離しないように)金属イオンと結合する部分の化学構造を設計するなど、様々な工夫をプローブに施しています。しかし、このままだとプローブと結合したすべての金属イオン(錯体)が発光してしまいます。つまり、それぞれの金属の種類を見分けることができなくなってしまいます。

光らせたものを電場の力で空間分離する

そこで、この金属-プローブ錯体試料を内径50μmほどの細い管に導入し、そこに20kVもの高電圧を印加することで分子が動きだすという現象(電気泳動)を応用した、キャビラリー電気泳動(CE)という分離技術で、金属の種類ごとに金属-プローブ錯体



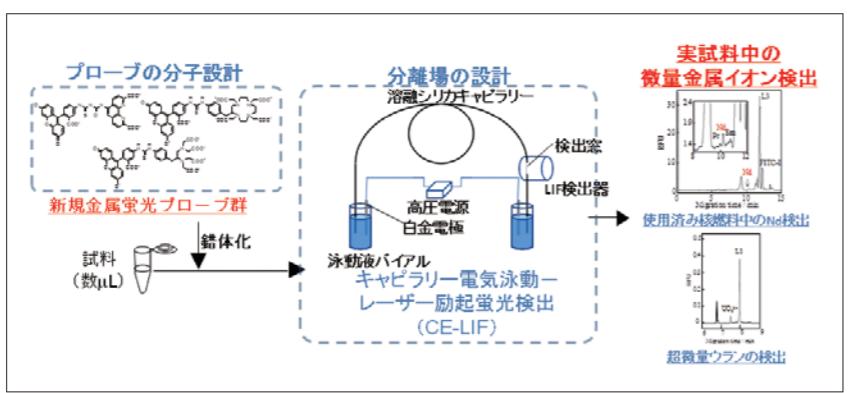
学生への実験指導

も、通常は煩雑な前処理が必要とされる複雑な組成の試料でも簡単に計測することができます。現在はこの方法を応用して、社会問題となっている汚染水などの環境試料中に存在するアクチノイドイオン類(ウランやプルトニウムなど)の高速・高感度・安全な分析法の開発に挑戦しています。これにより、迅速に分析情報を得ることや作業者の被ばくリスクの少ない(試料が少ないため放射線量が低い)方法が確立できると考えています。また、生体試料に応用することで、生命活動と重金属イオンの関係性が調査できる電気泳動法も開発しています。例えば、ヒト血清中の銅イオンがどのような化学形態で存在しているのかを正確に計測する方法の開発に成功しており、人体に有害な形態の銅イオンの存在が、これまでの学説よりも非常に低い濃度しか存在していないことを発見しています。

近年では、重金属イオンだけでなく、ある特定の糖分子や細菌類を発光化し、電気泳動法で分離検出することなどに挑戦しています。この様に、化学反応を利用して新たな分析法を作り出し、社会に役立つ方法や科学的真理を追究できる方法を作り出すことを目標に、研究室内の学生と共に研究に励んでいます。

人の役に立つ簡単な分析法を提案する

この方法は10μL程度の非常に少ない試料中の1兆分の1(ppt)以下の超微量な金属イオンさえ検出することができます。しかし、このままだとプローブと結合したすべての



SAIDAI WORLD CUP 2nd Spring

18th MAY 2013 Saitama Univ.
Saitama, Japan



留学生会の小さな発想の種が、
大きな花のつぼみに育つ

2013年5月18日、「埼大ワールドカップ2013 Spring」(通称スプリングカップ)が開催されました。2012年11月に開催された第1回大会から、わずか半年で第2回大会が行われましたが、埼玉大学全学留学生会の草の根的発想から生まれ、留学生会の手づくりで運営された第1回とは、規模も内容も一段とランクアップしたものとなっていました。

参加留学生10カ国約70人、企業8社約50人と参加者数が増え、運営スタッフには新たに日本人スタッフ4人が加わりました。また内容も第1回はフットサルの競技だけだったものが、本大会では競技後に交流会が催され、より深い親交が実現されました。

交流会では、通訳ボランティアの学生20人が加わり、英語でのコミュニケーションが苦手な人でも積極的に交流できる場がつくられていきました。企業の人、留学生が半々くらいになる小グループをつくり、チーム対抗のクイズ大会を行ったり、とても盛り上がった交流会になりました。第2回大会は、留学生と企業にとどまらず、日本人学生と留学生、留学生と留学生、日本人学生と企業といった、いろんなアングルのつながりができることが最大の成果だったといえます。

第1回大会の運営に携わり、本大会の実行委員長を務めた留学生会会長のラヒミさん(大学院理工学研究科)はこう語っています。



「正式なスタッフとして日本人が入ってくれたことは、大会趣旨である留学生と日本企業との接点を創出し、交流を深める意味で大きなプラスアルファをもたらしてくれました」



グローバル人材育成に期待のかかる「埼大ワールドカップ」

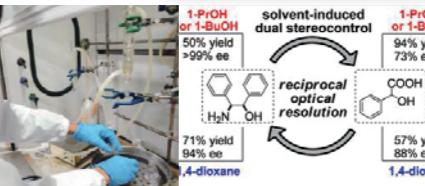
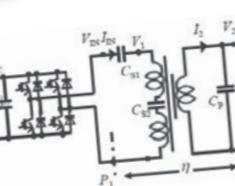
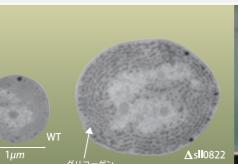
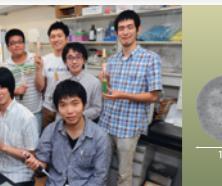
第2回大会が終わってすぐ、6月には第3回大会に向かた準備が始まっています。2013年10月19日、「埼大ワールドカップ2013 Fall」が埼スタ2002で開催される予定です^{※注}。2回までは全学留学生会が主催でしたが、第3回からはGGS(Go Global Saitama)の主催に代わります。さらに春、秋の年2回開催を定例化する予定です。

現在は、学生側の参加者は工学部と教養学部が占めていますが、それを他学部、県内の他大学にまで広げ、企業の参加数も増やし、より大規模な国際交流イベントに育ててゆくのが目的です。7月にはグローバル人材育成センター埼玉の開設セレモニーで本大会が大きく取り上げられました。大会名に冠の付いている埼大が運営の主体になることは変わりませんが、GGS関係者の皆さまは、会場の下見など学生とともに準備に励んでくださっています。

グローバル人材育成の視点からも、「埼大ワールドカップ」の今後が大いに期待されています。

※注:本誌が発行される段階では、すでに第3回大会は開催済みです。

埼大発、国際交流イベント 埼大ワールドカップ



The photograph concerning 01

The photograph concerning 03

The photograph concerning 05

The photograph concerning 07

The photograph concerning 09

The photograph concerning 11

● 2013.4.15
シアノバクテリアの代謝を制御する転写因子の働きを解明

大学院理工学研究科・環境科学研究中心 日原由香子准教授らは、シアノバクテリアにおいて代謝制御の鍵となるcyAbrB転写因子の働きを明らかにしました。

本研究では、遺伝子操作の容易なシアノバクテリアSynechocystis sp.PCC 6803のcyAbrB遺伝子欠損株について、代謝解析や光合成活性測定を行い、cyAbrB転写因子が糖異化・同化、CO₂固定、窒素同化等の各種代謝経路のバランスをとる上で重要な役割を果たしており、栄養条件が変動する条件下での生存に必須であることを世界で初めて解明しました。本研究は、研究課題「グリコーゲンから油脂へ：シアノバクテリア変異株の代謝改変」の一環として行われ、本成果は2013年4月15日(月)、米国の科学雑誌Plant Physiologyのオンライン速報版で公開されました。

● 2013.5.29
埼玉次世代自動車環境関連技術イノベーション創出センター「第3回シンポジウム」開催

埼玉次世代自動車環境関連技術イノベーション創出センター(事務局:埼玉大学)は、次世代自動車環境関連技術に携わる大学・官庁・企業の今後の研究開発や政策策定などにつながる情報共有の機会創出を目的に、年1回シンポジウムを開催しています。

本シンポジウムでは、構内に設置された次世代自動車教育研究用の「急速充電ステーション」の施設見学後、東芝研究開発センターとトヨタ自動車からお招きした講演者の基調講演、一般講演と続き、交流会では講演者や参加者との間で、次世代自動車の研究開発・普及に関する活発な意見が交わされました。今回も昨年と同様、一般企業・官公庁・他大学および本学学生など約260人の参加がありました。

● 2013.6.4
工学部 阿部・金子研究室が『NEジャパン・ワイヤレス・テクノロジー・アワード2013 優秀賞』を受賞

この賞は、日本の大学理工系研究室およびベンチャー企業のなかで、優秀な研究成果を残した技術者に与えられるものです。過去1年間の「日経エレクトロニクス」および「Tech-Oh!」に掲載された技術記事のなかから、10件がノミネートされました。

今回の受賞は『EVに向けた双方向ワイヤレス給電技術』に関する研究成果に対するもので、災害時などにEVから家庭に電力を供給可能にすることと、ワイヤレス給電の利便性を両立した点が高く評価されました。この研究は、自動車メーカーなどから注目を集め、産学共同で実用化を進めています。

● 2013.6.5
埼玉大学産官連携協議会 第14回定期総会および産学連携事例発表会を開催

埼玉大学産官連携協議会は、平成12年に県内企業と埼玉大学の研究とを有機的に結び付け、地域産業の一層の発展を図ることを目的に設立されたものです。第14回定期総会で会長は、地域経済・地域産業の競争力強化に今後一層貢献したいと抱負を述べられました。

総会後、大阪ガス(株)の基調講演「オープンイノベーション～新たな連携で新市場を創造する～」をはじめ、本学教授による事例発表と合わせて4件の講演が行われました。続いて交流会では、同協議会の「大麦食品研究会」「醸造酒研究会」が試作開発した、大麦力(パワー)食品(パン・パスタ)や「鳳翔閣」(埼玉大学ブランドの日本酒)が参加者に披露されました。



● 2013.6.14
グローバル人材育成特別講演会および交換留学フェアを開催

交換留学フェアは、国際舞台で活躍できる人材育成推進の一環として年2回行われ、平成24年に文科省のグローバル人材育成推進事業・特色型に採択されてからは、外部から講師を招いての特別講演会も併せて行っています。今回、第1部では、(株)JTBコーポレートセールス・国際交流センター酒井浩之氏による「企業が求めるグローバル人材像」をテーマとした講演が行われ、約70人の参加者から好評を得られました。第2部では、海外協定校に留学した日本人学生およびオーストラリア、アメリカ、ドイツ、スウェーデン等9カ国から本学に留学中の学生の協力のもと海外交換留学フェアが行われました。アジア、ヨーロッパなど大陸別にブースが出展され、留学先での学習内容や生活情報の交換などが積極的に行われました。来訪者は約90人、留学への興味や目的意識を高めるよい機会となりました。

● 2013.7.8
第2回埼玉大学・埼玉県経営者協会合同研究開発フォーラム開催

本フォーラムは、埼玉大学と埼玉県経営者協会が平成24年度から合同で行っている「研究開発フォーラム」で、企業経営者に本学の研究開発の最前線を認識してもらうことを目的としています。

7月8日、ソニックシティビル4階市民ホールにて、本学教授による研究開発の事例発表が3件行われました。(「振動発生メカニズムとその防止対策」「磁気浮上の新しい試み」「人に優しい機器開発のためのヒューマンインターフェイス技術」)

大学が希望する企業との連携内容や、企業からの相談に対応できる技術分野の説明もあり、参加者は熱心に耳を傾けていました。産学連携の機会となるフォーラムとして今後も期待されます。

The photograph concerning 02

The photograph concerning 04

The photograph concerning 06

● 2013.7.12
北海道で「One More 観光案内サービス」の実証実験を開始

本学を含む5機関(株式会社デンソー、日本航空株式会社、株式会社デンソーセールス、北海道大学)で取り組む、NEDOのプロジェクト「北海道における観光客導線による総合観光エコ事業」において、北海道をドライブ旅行する人を対象にした「One More観光案内サービス」の実証実験を7月12日より開始しました。

本サービスは、ITを効果的に活用し、観光に役立つ「One More」な情報を提供するもので、ユーザーの意見も反映しながら段階的に使い勝手を高めていく予定です。

● 2013.7.18
大学生がつくる埼玉の魅力発信フリーペーパー「埼友記」発行

本学経済学部の学生が取材・編集したフリーペーパー「埼友記」が埼玉県から発行されました。本紙発行は2013年度埼玉県の事業であり、県内で学ぶ大学生たちが埼玉の良さを自分たちで見つけ、さらに同世代に伝えることで、将来的な地域の活性化につなげていくことを目的としたものです。

当日は編集に参加した学生自らが、本学構内で配布を行いました。

● 2013.8.7
埼玉の中学生が新発見、米国化学誌に掲載

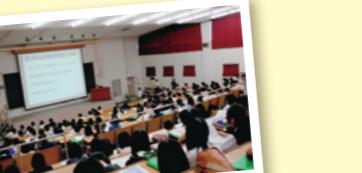
大学院理工学研究科が実施する「科学者の芽育成プログラム」において、越谷市立栄進中学校2年(現・埼玉県立越谷北高等学校1年)の新谷俊貴君が、工学部応用化学科・廣瀬卓司教授らと協力して、光学分割における溶媒による新しいキラリティスイッチング現象を見出し、1つの光学分割剤のみを用いてマンデル酸の1組の光学異性体の両方を得る方法を明らかにしました。

本研究は、2013年8月7日、米国化学会の有機化学誌(JOC)のオンライン速報版で公開されました。



● 2013.8.26-30
オープンキャンパス開催

各学部ごとに開催されたオープンキャンパスでは、学部・学科説明会に始まり、入試説明、研究内容紹介、模擬授業、在学生の体験談(大学での勉強や研究、サークル活動など)、学生によるキャンバスツアーや教員引率の学部棟探検、個別相談会などを行われました。いずれの会場でも、在学生、教員と触れ合う参加者で活気にあふれています。受付では埼玉大学のマスコットキャラクター「メリンちゃん」が来場者を出迎え、記念撮影する姿も多く見られました。



● 2013.9.20
平成25年度学位授与式を挙行

9月20日(金)、本学大学会館大集会室において、9月に学部を卒業する学生および大学を修了する学生を対象にした、平成25年度埼玉大学学位授与式を挙行しました。

授与式は、役員、各学部長、各研究科長列席のもと、上井喜彦学長から卒業生・修了生代表者へ学位が授与され、続いて学長式辞で激励の言葉をいただきました。卒業生代表挨拶、修了生代表挨拶と続き閉式となりました。

学位授与者数は合計73名、内留学生が30名という国際色豊かな式となりました。

● 2013.10.9
革新的摩擦機構に基づいた免震装置の開発に成功
— 産学連携による成果 —

大学院理工学研究科の齊藤正人准教授は、独自に考案した移動・転倒抑制のための革新的摩擦機構(「サイスティックス(仮称)」)に基づく新方式の回転摩擦デバイスを開発し、直下型地震のような「短周期地震動」から高層ビルを大きく揺らす「長周期地震動」までを安全に守る新たな免震装置を開発しました。この免震システムには、ユーザーの要求性能に応じて回転摩擦デバイスの摩擦力をユニット形式で可変できる新機構が採用されており、システムの仕様を容易にカスタマイズすることが可能です。

この成果は、サーバルームラック用免震装置(品名「SD-6」)として製品化され、10月に(株)昭電と共同で開発しました。この免震システムには、ユーザーの要求性能に応じて回転摩擦デバイスの摩擦力をユニット形式で可変できる新機構が採用されており、システムの仕様を容易にカスタマイズすることができます。

この成果は、サーバルームラック用免震装置(品名「SD-6」)として製品化され、10月に(株)昭電より発売されました。

今後、免震システムの仕様としての適用範囲の拡張、建物など幅広い対象物への活用が期待されています。



The photograph concerning 12

